

# 谷崎全集逸文二編

細江 光

## 1. 談話「独身生活をして」

「読売新聞」昭和6年1月1日4面

この談話の左隣りには、「写真阪急沿線岡本梅谷の寓居の谷崎氏 本社特派員撮影」という説明付きで、自宅庭をバックに和服姿で椅子に腰掛け、正面を見据える威厳ある潤一郎の全身写真が、四段抜きで大きく掲載されている。

昭和5年8月、千代子との離婚を発表して新聞各紙を賑わせた潤一郎が、「読売新聞」から特に頼まれて、同年12月下旬に、インタヴューと写真撮影に応じたものらしい。談話ではあるが、谷崎自身の閲読を経ているのではないか、という印象を受ける。

（別れた当座は非常に寂しい遺漸ない気がして仕事も手につかないといふやうなことがあるはしないかと）心配したという辺りは、「琴喰ふ蟲」の要と共通する。

（正月のうちに一度、紀州に遊びに行く積りである）と述べているが、昭和5年11月30日付けの妹尾健太郎・君夫妻宛佐藤春夫・千代書簡（秦恒平『神と玩具との間』（十五）所載）に、「正月には谷崎と一緒に遊びに来て下さい」とあるので、もともと佐藤側が誘ったものらしい。しかし、実行したことを裏付ける資料は、今の所出ていない。

《また新しい女房を持つ》つの《が本年の楽しみの一つだ。》と述べているが、高木治江の『谷崎家の思い出』によれば、谷崎は、昭和5年12月の上京時（野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』に

よれば、15(17日)に、丁未子に思いのたけを話したと言う。  
丁未子の「奥様見習の語る―谷崎氏と私との関係―」(昭和  
6年2月「婦人画報」)によれば、1月15日に正式に求婚した  
ようだから、この談話の頃には、十分成算があったのだろう。

\* \* \*

独身生活をして

谷崎潤一郎

この夏、女房と別れた事件は、前からよくよく考へてやつたことだから今更後悔する苦もないが別れてから既に四ヶ月の今日になつてみて、やはりいゝことをしたと思つてゐる。別れた当座は非常に寂しい遺瀨ない気がして仕事も手につかないといふやうなことがあるはしないかと、只それだけが心配であつたが、その寂しさも遺瀨なさも思つた程でない。寂しいうちにも妙にしんみりと気が落着く。佐藤夫婦と娘とは今、紀州の郷里へ帰つてゐるが、かうして離れて住んでゐて遙かに彼等のことを考へた方が本当の愛情や親しみを感じる。そばにゐて日常、顔を見てゐるよりは余計、彼等の美点が目につき幸福を祈る氣持になれる。佐藤等の方でも恐らく、さうであらうと思ふ。正

月のうちに一度、紀州に遊びに行く積りであるが離れてゐて却つて前より一層結びついた感じだ。

が、僕も今年は来て呉れる人さへあれば、また新しい女房を持たうと思ふ。これが本年の楽しみの一つだ。(談)

\* \* \*

## 2. 「白日夢」の映画化に寄せて

雑誌「シナリオ」昭和39年7月号

武智鉄二のシナリオ「白日夢」が掲載された際に付されたものである。

この機会に、武智鉄二と谷崎潤一郎との関係を簡単に通観して置く。

武智鉄二は大正元年生まれで、谷崎からは26歳年下になる。その二人の付き合いの始まりは、昭和21年、谷崎が疎開先の勝山から京都に転居して間もなくの7月頃であるらしい。

武智は昭和18年から京都に住み、京都の片山博道・東京の吉田幸三郎と、古典芸能の名人たちの芸を鑑賞する断絃会の活動を戦事下の昭和19年から続けており、昭和21年8月に創刊される雑誌「観照」でも、古典芸能の保護育成に力を注ぐことにな

る。

谷崎もまた、敗戦後暫くは、アメリカナイズされて行く戦後の日本に反発し、日本の古典的な芸術・芸能に心を向けようとしていた。

そんな二人を結び付けたのは、武智鉄二の「京都の谷崎先生」(現代文学大系第18巻「谷崎潤一郎集(下)」月報14号 昭和39年8月筑摩書房)によれば、多田侑史(1915)もと多田嘉七。後に改名)である。

侑史の父は、兵庫県武庫郡本山村北畑の家を、大正13年3月から15年2月にかけて谷崎に貸した事があり、当時数えて10から12歳だった侑史は、潤一郎に中華料理を食べに連れて行って貰ったりもした(後藤繁雄編著『独特老人』)。ちょうど潤一郎の娘・鮎子と一歳違いだったせいもあって、仲良くなったらしい。

侑史は成人後、「毎日新聞」記者をしながら、浄瑠璃・狂言を愛好し、武智鉄二とも親友になった。「観照」にも創刊時から参加している。そうした関係から、両者を引き合わせたのであろう。

その時期は明確ではないが、上司海雲の「訪京日記」(雑誌「天平」昭和22年3月)によれば、昭和21年7月16日に、片山

博通郎で行われた井上愛子(博道の妻で、のちの4世井上八千代)の舞の会には、谷崎・武智・多田が揃って参加したことが確認できる。恐らくは、この会の前後の事だったのであろう(武智は、「谷崎潤一郎の人と文学」(昭和58年11月「芸術至上主義文芸」)で、「観照」で谷崎の講演を無断で広告し、謝罪に行ったのが交際の始まりとしているが、それは昭和22年11月のことであり、「観照」の同年3月号には、既に谷崎・多田・武智が参加した座談会「吉田屋」検討)が掲載されているので、この謝罪は、交際が始まった後、さらに親しさを増す切っ掛けとなった出来事と考えるべきだろう)。

谷崎は昭和22年から24年にかけて、「観照」の座談会に4度参加し、1度寄稿、断絃会には、昭和21年冬の「古叡太夫を聴く会」に参加した事を「所謂痴呆の芸術について」で、22年11月28日に、断絃会主催富崎春昇演奏会の稽古を聴きに行った事を、「富崎春昇氏のこと」で書いている。

武智は、昭和25年8月、谷崎の『恐怖時代』を歌舞伎仕立て・血みどろの演出で上演し、谷崎から高い評価を受けた。

谷崎は武智を信頼し、昭和28年には、都踊りの『墨塗平中』の台本について、谷崎は着想を出しただけで、大部分、武智に執筆して貰ったりもしている(『高血圧症の思ひ出』)。

またこの年には、松子夫人の連れ子・清治が大林組に就職する際に、友人が大林組の重役だった多田伯史と、土木建設業で財を成した武智正次郎を父に持つ武智鉄二が世話をしたと言う。

昭和29年には、11月に武智が行った能・狂言様式による新演出の『夕鶴』（木下順二作）の稽古を谷崎は見つ、武智との対談「舞台芸術うらおもて」（昭和30年2月「中央公論」）で褒めている。

同じ29年の4月、武智は歌舞伎風の演出でオペラ『蝶々夫人』を上演し、画期的な成功を収めた。武智としては、これが初めてのオペラ演出であったが、その余勢を駆って、翌昭和30年6月には、谷崎の『白狐の湯』をオペラ化・上演し、谷崎は稽古にも立ち会い、本番も見に行った。この時は、狐の入浴シーンにストリップのヌードをヴェール越しに見せて、話題になった。

今回紹介する谷崎の『白日夢』の映画化に寄せてには、《今（昭和39年）から十年くらい以前》に、武智が『白日夢』『オペラ化』（の上演許可を求めて来た）とあるが、それは、この『白狐の湯』オペラ化の頃であろう。

この頃から、武智は性解放に向けた戦闘的な活動を強め、しばしば物議を醸し始める。それに対して谷崎は、積極的な支持

を表明した訳ではないが、概ね肯定的に見ていたようである。

例えば昭和31年9月に、OSミュージックホールで武智がヌード能「能楽教室」と称して「羽衣」「海人」「唐相撲」のパロディを上演した際にも、谷崎は見つ、非常に感心したと言う。そこで、武智は谷崎作品のヌード化を申し入れ、快諾を得たが、種々の事情で実現しなかったと言う（改田博三「上方ヌード盛衰記」）。昭和32年には、武智が『過酸化マンガン水の夢』の映画化を企画したが、スポンサーの都合で流れた（武智鉄二「蔑かれるエロス」『私の芸術とエロティシズム』）。

同年1月の武智と川口秀子の結婚の際には、谷崎が、武智と愛人・西村みゆきを手切れ金五十万円を手を切らせ、吉田幸三郎と相談の上、武智の後見人に舟橋聖一を指名するなど、立ち入った面倒を見た（武智鉄二「私の芸術人生女性」）。

また、同年4月、武智の企画で、テレビ版『細雪』に出た松子夫人の連れ子・恵美子が演劇熱に取り憑かれると、武智がその世話を引き受け、武智のもとで共演した親世栄夫との昭和35年の結婚も、お膳立てしたのは武智であった。

時期は定かではないが、昭和33年8月に開局した大阪の読売テレビからドラマを何かやってくれと言って来た時も、武智は『白日夢』のテレビドラマ化を考えたが、この話は立ち消えに

なつたと言う(『映画『白日夢』写真集』所収・武智鉄二「白日夢談叢」)。

こうした信頼関係と経緯の上に、昭和39年、映画『白日夢』は作られたのである。映画『白日夢』および、それに続いて作られた『紅閨夢』の評判は余り良くなく、その為に、これらの映画は、谷崎のあずかり知らぬ所で勝手に作られた谷崎とは無関係のものとする向きもあるようだが、それは適切とは言えないだろう。

全集に収録されている「路さんのこと」(「マドモアゼル」昭和39年6月)は、余りに軽い内容だったが、今回紹介する谷崎の『白日夢』の映画化に寄せてには、社会の良識の棒を破って、『鍵』『瘋癲老人日記』から更に踏み出そうとする谷崎の気迫が示されているようである。

なお、昭和31年3月、「文芸」臨時増刊「谷崎潤一郎読本」に掲載された武智鉄二の「谷崎潤一郎の戯曲について」は、幾分手前味噌の嫌いはあるが、谷崎の戯曲を考える上で、見落とせないものだと思う。

最後に、武智鉄二については、権藤芳一氏が雑誌「上方芸能」に連載された「武智鉄二資料集成」に教えられた所が多いことを記し、感謝の意を表したい。

「白日夢」の映画化に寄せて

谷崎潤一郎

武智君が「白日夢」の上演許可を求めて来たのは、たしか今から十年くらい以前の事であった。最初はオペラ化するやうな話だったが、後にはミュージカルにしようかなどと、色々迷っている様子だった。

その結果が今度の映画化となったもので、そこへ辿り着くまでの武智君の創造の苦しみと言うか、芸術家精神の屈折が、私には手に取るやうに判る気がする。

私がこの作品を創作した頃は、検閲その他の政治的、社会的制約が強く、その為、思ふ存分に書く事が出来なかった面も多い。武智君のシナリオは、その点、今の私なら恐らくかう書いたであらうと思うくらい、完璧な出来栄である。

主演女優の路加奈子君にも会ったが、私のイメージそっくりの人で、さぞ美しい画面を見せてくれる事と思ふ。